Osaka University Knowledge Archive

Title	クリスチャン・ディオールのファッション造形について : 1947年～1957年の超機能主義的デザイン
Author(s)	滝口, 洋子
Citation	デザイン理論. 1993, 32, p. 48-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53247
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

クリスチャン・ディオールのファッション造形について
――1947年～1957年の超機能主義的デザイン――

滝　口　洋　子

はじめに

ファッション・デザインは，防寒や防御という機能に着目すればプロダクト・デザインの領域であり，自己表現や身体装飾的な機能からみれば，ビジュアル・デザインと深く関わりがある。また，人間が主体となって装うものであるから，その人をとり囲む環境や空間のデザインと切り離すことはできない。さらに，衣服を引き立てるものとしてのアクセサリー，メイクアップや肉体の美，そして表現の場としての舞台，映像などを含めるとほとんどすべてのデザインの領域に関わっているといえる。このようにファッション・デザインは総合的なデザイン活動であるにもかかわらず，一般のデザイン史やデザイン論の中で取り上げられることは極めて少ない。それには様々な理由が挙げられるが，その傾向をもたらした最も大きな要因は，クリスチャン・ディオールその人ではないだろうか。彼のデザイン活動がファッション・デザインを他の全てのデザインや芸術と一線を画したものとしたのである。ディオール以前のデザイナーのポワレやシャネルは，ファッション界のみならず，当時のあらゆる芸術，文化の中心に位置していた。彼らの創り出したドレスは，他分野のデザインと同様に機能性を重視する方向へ進んできた。ところが，ディオールは彼らと全

く違う見解を持っていた。彼はファッション・デザインにおける機能性を，ポワレやシャネルのような狭い意味ではとらえておらず，個人的な用途や目的，また造形美までを含めて考えていたのではないだろうか。超機能主義ともいえる彼のファッション造形では，時に主役であるはずの装う人が二次的な存在となってしまう。ディオールのドレスは，彼の求める理想的なシルエットを表現するため，さまざまな工夫がなされていた。そして，彫刻のように美しいが行動はしにくいドレスの数々が創造され，それらはとても速いスピードで変化した。彼は半年ごとに変化する流行のラインを生み出したのである。その結果として，ファッション・デザインは機能性を重要視する他の分野のデザインの流れから，はずれていくことになる。

この研究報告は，ファッション史の中でも特異な10年間であるラインの時代（1947～57）をつくったクリスチャン・ディオールのファッション造形を中心に，ファッション・デザインにおける造形性，機能性，装飾性について考察したものである。

ディオール以前のファッション

19世紀のファッションは，クリノリン・スタイル，バッスル・スタイル，Sカーブ・シルエットと1世紀にわたり少しずつ変化してきたが，これは今日のようにデザイナーが意識的に変えたものではなかった。シルエットは動かすことのできない決められた形であり，彼らの仕事というのは布地を選ぶことと，可能な限りの表面装飾（刺繍，フリル，ビーズ，レースなど）を施すことにより，他のドレスと違ったものを創ることであった。

20世紀に入り，さまざまなジャンルの芸術が自由に交流していたパリに，ポール・ポワレが登場する。彼はコルセットなしのギリシア風のドレス，トルコ風のパンタロン，東洋調のマントなどを次々に発表する。女性たちは彼によって初めて衣服による束縛を解かれ，行動の自由を与えられた。また，ポワレは

ファッション以外の分野にも広く活動の輪をひろげて，アール・デコの発展に大きく貢献していた。

第一次大戦（1914～19）後の女性たちは，ギャルソンヌと呼ばれた。自ら車を運転し，煙草を吸う彼女たちはファッションにも現実性，機能性を求めた。この時代を代表するデザイナーがココ・シャネルである。彼女のデザインは，表面装飾のない明確なシルエットを持ち，少ない用尺の良質の素材で創られていた。彼女は，モダン・デザイン的な思想をもった初めてのファッション・デザイナーであり，国や時代，装う人の年齢を越えて受け入れられるファッションを目指していた。

“不況の30年代”のファッション界は，エルザ・スキャパレリのエキセントリックなアイデアによって彩られる。彼女のドレスの基本のシルエットは，肩パッドを入れた広い肩とほっそりしたヒップをもった，ソフトな流線形だった。そのため，あらゆる風変わりな附属物にもかかわらず，とてもエレガントな印象を与えた。

第二次大戦（1939～45）中は，スカート丈が短くなった以外は大きな変化は見られない。肩を強調したボールド・ルックと呼ばれる実用的な衣服であった。

ディオールの経歴

クリスチャン・ディオールは1905年１月21日に，ノルマンディ地方にあるグランヴィル市で生まれている。父親は曾祖父が設立した肥料会社を経営しており，土地の人々から尊敬を集める裕福な家庭だった。青年時代を過ごした20年代のパリはアール・デコの全盛期であり，次々におこる新しい芸術運動はディオールの心を奪うものだった。

1928年，23歳になったディオールは，友人とともにボエティ通りに小さな画廊をひらく。ここでは彼らの尊敬していたピカソ，ブラック，マチス，デュフィを中心に，クリスチャン・ベラール，ダリ，キリコ，ユトリロ，レジェなど

の作品を扱っていた。経営は最初は順調であったが，恐慌の影響を受け31年に倒産してしまう。同じ頃父親も事業に失敗したため，働いて家族の生活を支える必要があった彼は，ファッション・スケッチを描き始める。彼の絵は評判を呼び，フィガロ紙のモード欄に掲載されるほどになった。そして38年に人気デザイナー，ロベール・ピゲの店にデザイナーとして招かれることになる。

やがて，第二次世界大戦が始まり，ディオールはムーアンに動員される。敗戦後しばらくは，南仏のカリアンで野菜をつくってはカンヌまで売りに行くという生活をしていた。41年にパリに帰り，ルシアン・ルロンの店に入る。パリ・クチュール組合の会長であったルロンは，パリ解放（44年８月）後，いちはやく連合軍にパリ・モードを見せて驚かせた。

46年12月，大資本家のマルセル・ブサックの支援で独立。モンテーニュ街30番地に店を持った。この時の彼の夢は，こじんまりした店で，選ばれた顧客（世界でも十の指に入る裕福な女性）のために，オートクチュールの粋を集めた仕事をすることだった。すべてが機械化されていく時代に，フランスの伝統である豪華な仕立ての服づくりに帰らなくてはならない。新しい店は工場ではなく，職人の仕事場としなければならないと考えていた。

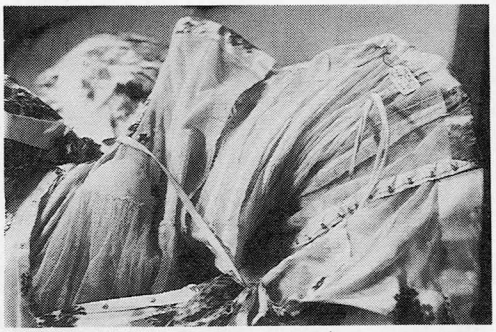
1947〜49　ニュールック

47年２月，ディオールは初めてのコレクションを発表する。彼自身は「カローラ・ライン」と名付けたが，ハーパースバザー誌の呼んだ「ニュールック」というネーミングとともに世界中にセンセーションを巻きおこした。このラインは，それまでのボールド・ルックとは対照的なものであり，ディオールは，彼の理想とする母親のイメージを非常に女らしく贅沢に表現した。彼は，「我々は戦争中の拳闘家の肩のような婦人兵の制服の時代から抜けだしたばかりだった。私は優しい肩，ふくらみを持った胸，草の茎のように細いウエストで，花のようにひろがったスカートを着た花のような婦人を描いた。」と述べ

1947　カローラ・ライン

1947　カローラ・ライン

ている。ディオールのドレスは，それまでのものにはない建築的な構造になっていた。ドレスの下には真鍮のワイヤー入りのブラジャー，バスト用のパッド，細いボディのためのコルセット，ヒップ用のパッドをつけていた。スカートは20〜25ヤールもの布地が使用され，その下に何重にも重なったナイロン（1937年発明）のチュールやオーガンジーのペチコートが続いていた。ディオールの作品は，20世紀の初めよりファッション・デザインの歩んできた機能性への動きを全く無視したものだといえる。重いものでは20kgを超えており，女性の身体はさまざまな工夫でデフォルメされ，また，一点の制作時間が300時間もかかるものさえあった。縫製は脇や背など一部にはミシンが使用されたが，ほとんどが細かな手作業によるものだった。これらについて批判的な意見もあったが，彼は「心が軽やかなら布地の重さなど苦痛にはならない」と述べている。続く48年には春に「ジグザク・ライン」「アンヴォル（飛翔）ライン」，秋に「エール（翼）ライン」が発表された。49年の春は「トロンプルイユ（だまし絵）」であり，秋が「ミッド・センチュリー（世紀の半ば）」であった。これらのラインの基本的なシルエットは，ニュールックと同じであったが，活動的なイメージがプラスされ全体に若々しくドラマチックな印象を与えた。48年では，



右　ドレスに組み込まれた，ワイヤー入りのコルセット，ブラジャー，ヒップパッド
左下　1948　エール・ライン
右下　ニュールックのアクセサリーとディオール

アシンメトリーな効果や，衿やペプラムの翼のような飾り，カフスや袖の変化といったディテールに楽しいアイデアが見られる。「トロンプルイユ」では，バストをより豊かに見せるため，胸元に視線を集めるような大きな衿やアクセサリー，胸の上のポケット，大胆なカットのネックラインなどが工夫された。ディオールにとっての装飾は，人間の三次元の身体やそのボリュームの再配分といったキュビズム的考えをふまえた立体的装飾であるため，造形的ではっきりしたフォルムを持ち，テーマを明確に表現している。

1950〜53　シルエットの変化

50年春「バーティカル（垂直）ライン」，秋「オブリーク（斜め）ライン」，

左上　1951　ロング・ライン　マルタンガルによってハイウエストにみえる。
右上　1951　オーヴァル・ライン
左下　1952　プロフィール・ライン
右下　1953　チューリップ・ライン

51年春「オーヴァル（卵形）ライン」，秋「ロング・ライン」，52年春「シニュアス（曲線的な）ライン」，秋「プロフィール・ライン」，53年春「チューリップ・ライン」，秋「エッフェル塔ライン」，「クーポール（丸屋根）ライン」が発表される。この時期の大きな特徴としては，まずスカートの変化が挙げられる。ニュールックのたっぷりしたフレアースカートがなくなり，ストレートなシース・シルエットが主流になる。次に，ウエスト位置の変化で，オーヴァル・ラインからハイウエストへの移動が見られる。実際にはウエストは自然の位置にあったが，バストの少し下での切り替えやマルタンガル（背バンド），短いジャケットによってハイウエストに感じられた。三つ目の特徴は丸みの表現である。複雑なカッティング（布の縦地やバイヤス地が交差したり放射線状

に出ていたりする）と，ディオールが「妖精の指でしたような仕事」というオートクチュールならではの技術で布地を彫刻のように丸みをおびた立体に仕上げている。女らしいシルエットのオーヴァル・ライン，シャープにボディラインを描くプロフィール・ライン，そしてチューリップ・ラインではグラマラスの極限ともいえる造形美がみられる。バストは大きく横にふくらみ，その曲線は袖と肩へ続いている。細いウエストはベルトでは強調されず，なだらかに腰へ続き，長い茎をイメージさせた。

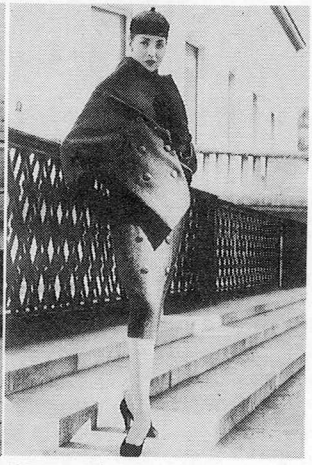
1954〜56　アルファベットのライン

これまでのディオールの女性のイメージは，豊かな胸と細いウエスト，丸みのあるヒップをもつグラマラスな大人の女性であったが，54年からは，若々しく少年のようにほっそりした身体をもつ女性へと変化していく。

54年秋の「Hライン」はルネサンスの時代からインスピレーションを得て，細い姿態をだすために胸を高く上げ，ウエストをヒップ近くまで下げて長いボディを強調している。そこから，清らかさや優雅さを表現しようとしたのである。Hラインは，バストの否定が目的であったように理解されがちであるが，

1954　Hライン

1955　Aライン


1955　Yライン

1949
トロンプルイユのポケット

1954　Hラインのポケット

ディオールの意図からすれば，バストよりもウエストに注目すべきであろう。51年より慎重にすすめられてきたウエスト位置の移動やベルトのないウエストがHラインでは一歩進化し，完全に解放されている。続く55年には春に「Aライン」，秋に「Yライン」が発表される。AラインはHラインを裾ひろがりに展開したものである。Hラインよりもさらに若々しいイメージがあり，またどんな種類の服装にも応用ができたため非常に人気があった。Yラインは，HラインやAラインよりも少し大人のイメージで，シルエットのポイントは肩へと移った。衿や肩がストールに続くものなど色々なアイデアが見られる。

54年には71歳のシャネルがファッション界にカムバックする。彼女は復帰の理由を「女性の身体をさまざまな馬鹿げた形に押し込めて苦しめているデザイナーたちの行き過ぎから女たちを救済するために」と述べている。彼女の追求するファッションは，あくまで装う女性が主体であるため，着やすく，大げさでなく，エレガントなものであった。彼女のドレスには，ポケットがちょうど手の届く位置に，手や小物を入れやすいカーブをもって付いていた。それは，ドレスの機能性の象徴であり，男性に頼らない自立した女性のシンボルであった。一方，ディオールにとってのポケットの役割は全く違っていた。トロンプルイユの時にはヒップラインから外に大きく飛び出して二つも三つも並べて付けられ，ヒップの丸みを強調している。また，Hラインでは，胸よりずっと上の位置と，ヒップからまだ下の位置にあり，ロングトルソーを表現している。それらは，物が入らないわけではなかったが，誰も入れようとはしなかっただろう。彼にとってポケットは装飾的な機能とテーマを表現する機能をもっていた。装う人のためではなく，それを見る人のためについていたのである。

1957　サック・ドレスへ

ディオールにとって最後の年のコレクションは，「リーブル・ライン」と「フュゾー（紡錘形）・ライン」と名付けられた。この二つのコレクションは，

それまでのように造形的なフォルムの美しさがテーマではなく，計算されたゆとりから生まれる動いた時の美しさがテーマとなっている。Hラインでウエストを解放し，Aライン，Yラインで少しずつサック・ドレスへの試みを行い，57年のフュゾー・ラインで完全にルーズなシルエットを完成させた。

1957　リーブル・ライン

1957　フュゾー・ライン

ディオール以降のファッション

ディオールの活躍した時代までは，ファッション・デザイナーたちには大きく分けて二つのグループがあったといえる。一つはシャネル，バレンシアガ，ヴィオネに代表される，人体を第一の基準として，時代や年齢を越えた不変的な美を追求していくグループである。そして，もう一つは，シルエットの美しさを最優先させ，いろいろな意味で装飾的なグループであり，ポワレからスキャパレリ，ディオールへと続く西洋服装史の本流である。彼らは時代のトレンドを創造し，世界を動かした。ファッション・デザインの成立する条件として，プロダクト・デザイン的な実用性，ビジュアル・デザイン的な社会性あるいは装飾性が挙げられるが，これらの二つのグループには，上記成立条件において何を重視するのかという思想の違いが存在するのである。二つのファッションは，この思想の違いによって相容れるものではないと思われたが，57年にディオールが，リーブル・ライン，フュゾー・ラインを打ち出した時点で，バレンシアガはサック・ドレス，チュニック・ドレスを発表しており，ほとんど同一のシルエットとなっている点は興味深い。そして，フュゾー・ラインを発表後ディオールは死去し，サック・ドレスの全盛をむかえる。60年代に入ってサック・ドレスは，イヴ・サンローラン，クレージュらによってさらに近代的，合理的に発展させられる。幾何学ラインやスポーティブ・ルックと名付けられたこれらのファッションは，もうこれ以上省くところはないほどシンプルで，スポーツができるくらい動きやすく，大量生産が可能であった。ファッションは，特権階級の婦人たちのオートクチュールから，一般の若い人々を対象とするプ

レタ・ポルテへと変化したのである。ここで初めて，ファッション・デザインは本当の意味でのモダン・デザインの時代に入ったといえる。それまでは，シャネルがいかに機能性を唱えようと，それはオートクチュールの範囲においてであった。オートクチュールのデザイナーの創り出したドレスはあくまで「サンプル」であり，顧客の体型や趣味にあわせてアレンジしたものを，一点一点手作業によって縫製していたのである。プレタ・ポルテの時代に入って，ドレスの規格化が行われ，大量生産された同一のドレスがブティックに並ぶようになった。そしてファッションは，すべての年齢，すべての階級の人々のための産業に発展する。

デザインや建築の世界でおこった70年代のポスト・モダン運動の時期には，ファッション・デザインにおいても同じような現象が見られる。それらは，エスニック・ルック，デコントラクテ・ファッションとして展開された。ミニ・スカートを中心としたシンプルで画一的なシルエットに行きづまり，発想の源が地域性，民族性へと変化したのである。

80年代には，デザイナーの仕事は各人各様となり，トレンドは消滅する。デザイナーが流行を支配する時代は終り，主導権が消費者へと移ったため，あらゆるスタイルが同時に存在し，多様化への道を歩みはじめる。そして今，90年代も半ばとなり，現代のファッションは個性や価値の多様化といった現象がますます進み，さらには過剰な情報が現状を見えにくいものにしている。ドレスのデザインよりも，コーディネイトや着こなし方へと関心が移り，保守的ともいえる傾向が感じられる。混乱し目標を失ったファッションが次の時代に求めるものは何だろうか？ファッションは常に時代とともにあり，そこに不足しているものを求めてきた。今，我々の時代に失われつつあるもの ── それは，夢，ファンタジー，ロマンといったダイナミックなテーマではないだろうか。

これらのテーマをもとに，ファッションはクローズからコスチュームの意味をもつだろう。多様化現象はさらに進化し，一人の人間の中でも多様化が見ら

れ，何種類もの人間を演じ分けるように装いはじめるだろう。現代の社会生活には，機能性を重視した衣服は必需品であるが，数多い目的のなかには，着やすさよりもフォルムの美しさや，ドラマチックで夢のあることのみが機能であるようなコスチュームは必要ではないだろうか。

ディオールのファッション造形は，機能主義を目指して社会全体が動いているなかにあって，機能を超え，自身の美を創造し続けた点で，アーティストとしての評価をされなければならない。彼は流行を創り，世界中に彼のファッションをひろめ，パリ・ファッション界を支えていた。その商業的な功績があまりにも大きすぎたため，かえってアーティストとしての面は見過ごされがちであるが，彼こそ20世紀のファッションにおける芸術家として認められるべきであろう。そして，私達の装っている衣服についても，その日常的な商品価値のみが追求されるのではなく，アートとの接点についてもっと考察されなければならないだろう。もう一度，強い個性と新しいメッセージをもったファッション造形の出現を期待したい。

参考文献

- Françoise Giroud, Christian Dior 1905～1957, Thames and Hudson Ltd. 1987
- Hommage à Christian Dior, Musée des Arts de la Mode 1986
- ブリジット・キーナン著　金子桂子訳『クリスチャン・ディオール　1947～1957』文化出版局　1983
- 南　静著『パリ・モードの200年Ⅰ』文化出版局　1975
- 南　静著『パリ・モードの200年Ⅱ』文化出版局　1990
- 千村典生著『増補新版ファッションの歴史』鎌倉書房　1983
- クリスチャン・ディオール著　朝吹登水子訳『私は流行をつくる』新潮社　1953
- クリスチャン・ディオール著　上田安子，穴山昴子訳『一流デザイナーになるまで』六月社　1957
- *VOUGE*　1947.3/4月号～1957.11月号

※本稿は，第134回意匠学会研究例会で口頭発表した「クリスチャン・ディオールのファッション造形について ── 1947年～1957年の反機能主義的デザイン ──」を加筆，訂正したものである。

（たきぐち・ようこ　京都芸術短期大学）

クリスチャン・ディオール略歴

		ウィーン工房（1903）
1905	1月21日　フランスのノルマンディ，グランヴィル(Granville)市に生まれる。 父　Alexandre-Louis-Maurice Dior 母　Marie-Madeleine Martin 5人兄弟（兄・姉・妹2人） 父は曾祖父の設立した化学肥料会社を経営	ポール・ポワレ開店 フォービズム運動 キュービズム（1907） ドイツ工作連盟 イタリー未来派宣言（1909）
1910	家族はパリ16区パッシィに移る	ロシアバレエ人気 マドレーヌ・ヴィオネ開店（1912）
1914	レコール・ジェルソンの中級に入学 1914〜16　戦争のためグランヴィルにもどる	第一次世界大戦（1914〜19）
1916	パリの中学　リセ・ジャンソン・ド・サイイ入学	ダダ宣言 バウハウス開校（1919）
1920	芸術に興味をもち，音楽家，作家，画家などの若い友人ができる	エスプリ・ヌーヴォー創刊 ココ・シャネル開店 ソビエト社会主義共和国連邦成立
1923	文科と理科のバカロレアに合格 建築家になりたかったが，両親が外交官を希望したため政治高等学院に進学	
1924	作曲の勉強をはじめる（ストラヴィンスキー，六人組の影響） 友人たち 作曲家　アンリ・ソーゲ フランシス・プーランク 画家　マックス・ヤコブ クリスチャン・ベラール 歴史家　ピエール・ガクソット デザイナー　ジャン・オゼンヌ 写真家　アンドレ・オスチェ	シュールレアリズム宣言 アールデコ展（1925） ジョゼフィン・ベーカー登場 デッサウ・バウハウス（1926）
1927	兵役　ベルサイユ第五連隊歩兵	
1928	除隊後ボエティ通りにジャック・ボンジャン Jacques Bonjean とギャラリーをひらく 外交官のための学業はあきらめ退学	世界大恐慌（1929）
1930	父は破産，母は急死，兄は精神病になり，家族はグランヴィルへひきこもった	ナイロン発明
1931	北欧，ソ連を建築家たちと旅行 ギャラリーが破産したが，ピエール・コール Pierre Colle のギャラリーを手助い，シュールレアリズムやアブストラクトの展覧会を続ける	ル・コルビュジェ「サヴォア邸」
1932	ギャラリー閉鎖 楽天的なボヘミアン生活を送る	ヒットラー首相就任（1933）
1934	心労と栄養失調のため病に倒れる	ニューディール政策
1935	病気がなおりはじめ，ゴブラン織を学ぶ デュフィの大作「パリの地図」を売って生活する	

	ジャン・オゼンヌ Jean Ozenne と同居し，ファッション・スケッチをはじめる	スペイン内乱（1936）
1937	デザイン画がフィガロ紙に連載される ロベール・ピゲ，パツウ，マギー・ルフたちにデザインを売る	ニューバウハウス設立 パリ万国博覧会 ピカソ「ゲルニカ」
1938	ピゲ Piguet 店のデザイナーとなる	
1939	兵役　ムーアン	第二次世界大戦（1939～45） ナイロン・ストッキング開発
1940	軍務から開放される プロヴァンスのカリアンで農業をしながらギャラリーの残った絵を売って父，妹の生活を支える	アメリカ版ヴォーグ創刊 フランスの大半がナチに占領される
1941	パリにもどり，パリ・クチュリエの長老ルシアン・ルロン Lucien Lelong 店に入り，ピエール・バルマンとともに店の責任をわけあう	ポリエステル開発 パリ開放（1944）
1945	繊維業界の大資本家マルセル・ブサック Marcel Boussac と会う	ピエール・バルマン独立 テアトル ド ラ モード展
1946	ルロン店を去り，ディオール店の開店準備 ブサックは2,500万フラン投入する モンテーニュ街30番地に店をつくり，3つのアトリエ，60人のお針子，6人のモデルを集める 父　死亡	パリ平和会議
1947	2月12日　ディオール店の初コレクション発表「ニュールック」として大成功 9月渡米　テキサス州ダラス市でマーカス賞を受賞 Nieman Marcus Oscar for Fashion	インド独立 ニューヨーク国連本部建築
1948	香水会社，ストッキング会社を設立 ニューヨークにディオール社設立	
1949	ニューヨークに香水会社設立	東西ドイツ成立
1950	クィーンエリザベス，プリンセスマーガレットのためのプライベートショー開催 レジオン・ドヌール Légion d'Honneur 賞受賞	朝鮮戦争 ロンシャンの教会建築(1950～54) アクション・ペインティング
1951	「Je suis COUTURIER」出版 ニューヨークに毛皮会社設立	アンフォルメル・アート
1952	ロンドンにディオール社設立 モンテーニュ街の本店は8階建てのビルが2つになり，24のアトリエをもっていた	
1953	ベネズエラにディオール店設立	
1954	ディオール社の年間総売上額は60億フランを越えた。サンローランがディオール店に入る	ココ・シャネル モード界にカムバック ピエール・カルダン開店
1955	ソルボンヌ大学で特別講演「今日のモードについて」	
1957	開店10周年を祝う 「Christian Dior et moi」出版 10月24日　心臓発作のため死去 21歳のサンローランが後継者となる	人工衛星打ち上げ